

「事柄の本質を読み解く力」を



理工学部長

かざま
風間

しげお
重雄

この数年、教育界で話題になっている国際的な学習到達度調査が二つある。ひとつは、理科ならびに数学の知識量を問うTIMSSで1995年から行われており、日本はやや下降気味ながらもずっと相当上位に位置している。もうひとつは経済協力開発機構（OECD）が2000年から始めた略称PIISAで、知識量よりは、「問題解決能力」や「知識を活用する能力」を測ることを主眼としている。PIISAの対象は15

歳の生徒であるが、日本の成績は世界的に見ると上位グループには位置するものの、あまりふるわない。この調査で一躍脚光を浴びたのはフィランドである。読解力調査では平均得点で日本よりも50点近く上回って世界第一位であった。その後、フィランドには教育視察団が訪れるようになったが、彼の地の先生方は、「わたしたちは何も特別なことはし

ていない。普通に子供たちに好きなように勉強させているだけだ」と困惑気味に語ったという。しかし、フィランドは知る人ぞ知るIT大国である。

この春、受験勉強から解放されて大学生となった皆さんにとつて、最も要求されていることは、「事柄の本質を読み解く力」の涵養である。最新のノウハウは必ずすたれ、知識も陳腐化する。いつまでも持ちこたえられるものは、「読み解く力」である。そのためには理工学部は格好の場である。自然の不思議を肌身に感じ取り、人類の資産である科学を通して自然を読み解く。高度な技術の背後にある人類の知恵を読み解き、新たな知恵へとさらに発展させる。科学が新技術を生み、新技術が新たな科学の展開をうながす。そのようなダイナミックな知的興奮を味わえる仕合わせを日々噛みしめながら、充実した大学生活を送ってほしい。